

今治歴史散歩

大成経凡

～今治港開港 100 周年に寄せて～

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第32回は、大正11（1922）年に四国初の開港場となった頃の今治市を、今治花柳界の様子とともに歴史散歩したいと思います。

第32回 今治の芸妓と花街

●今治にあった花街

商工業の発展に呼応するかのように、かつて港町・今治にも多くの芸妓（芸者）がいて、三味線・唄・舞踊をお座敷で興じる花街（花柳界）の賑わいが見られました。その芸妓を統括するのが検番（見番・券番・券場）や置屋と呼ばれる組織で、芸妓をとまなうお座敷遊びは、広い座敷を有する料理屋や旅館で楽しむことができました。

明治初期の花街は、今治港に臨む新地や金星川沿いの川岸端に所在しましたが、明治20（1887）年頃に米屋町へその多くは移転し

ています。明治43（1910）年正月の海南新聞・年賀広告には、米屋町の今治共栄舎芸妓券番に所属する70名の芸妓が記され、翌年の同正月広告には検番のもとで置屋業を営む9名の主人とそこに所属する芸妓名が記されています。置屋主人が検番の役職も兼ねていたようで、明治末期から大正初期にかけて、芸妓が得た線香代（花代）を着服する置屋主人が横領罪に処されるなど、紙上を賑わせております。

大正5（1916）年3月27日付の海南新聞には、「今治の町 花柳界」と題した特集記事が見られます。要約すると、当時の今治には64名の芸妓がいて、ほとんどが色香盛りの16・17歳～25歳の春蘭な女性とのこと。年増の老妓や振袖可愛い舞妓が極めて少なく、これを他地域と比べて「いかにも実利主義な土地柄、と皮肉っています。

●式典に花を添えた芸妓たち

大正4（1915）年11月、天皇即位を祝う今治町の御大典では、今治各町の出し物による仮装行列が催されました。その模様は近本文泉堂が写真帳



はしけぶね
舢艀船の利用が見られる今治港（絵葉書より）



米屋町渡邊席の芸妓・笑子
（大正4年11月発行、『富の今治』より）



今治共栄舎の余興
(大正5年1月、近本文泉堂『即位式御大典 奉祝余興写真帳 伊予今治』より)

に収録し、海南新聞にも詳細が記されています。その中で、今治共栄舎券場は組合内75名の芸妓が仕丁姿で屋台4台に乗り、五節舞・千代の寿など各種舞を演じ、行列の先頭を練り歩いて式典に花を添えています。この日の衣装は大阪市の業者に約1,000円で発注し、集合写真は絵葉書にもなりました。

同じ頃、今治町の繁栄を記した『富の今治』(長谷川義一編)には、各商店・会社が広告記事を載せる中で、米屋町の置屋・渡邊席は芸妓の笑子・かるた、竹内席は玉蝶のブロマイドを掲載しています。まさに芸妓は、今治の富の一面を映し出す鏡のような存在でした。

後の大正13(1924)年2月の国鉄今治駅開業では、誕生したばかりの市公会堂で、今治芸妓総出の祝賀踊りが催されています。

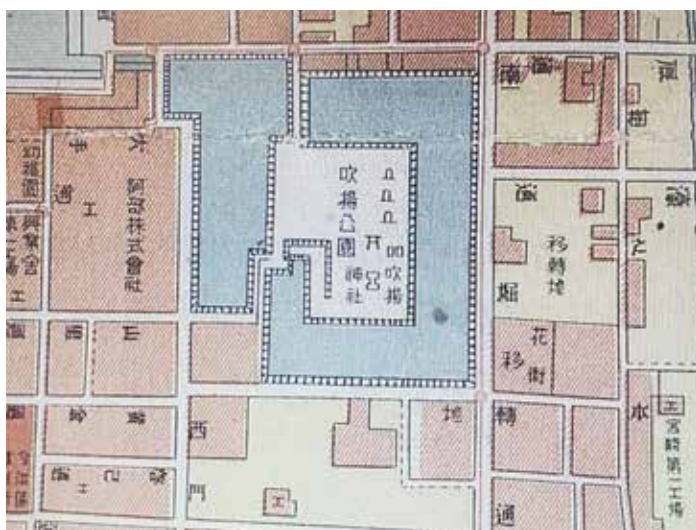
一方、大正9(1920)年に市制施行した今治市は、`四国のマンチェスター、や`伊予の大阪、とも称される四国有数の商工業都市でしたが、`四国のリバプール、と称されることはありませんでした。英国のリバプールは、当時の世界最大の港湾都市で、マンチェスターで生産された織物製品の積出港であったのです。そもそも市制施行の背景には、今治町と日吉村が合併し、財政基盤を向上させて築港整備を円滑に進めることにありました。花街の賑わいは、港町の繁栄と景気の動向に大きく左右されることになります。

●開港場指定と移転地の誕生

東の風に弱い今治港は、藩政時代から築港整備が課題でした。堆積した海砂の浚渫にも悩まされ、大がかりな防波堤構築や大型船寄港の栈橋設置などが求められました。この解決に一石を投じるのが大正11(1922)年2月の開港場指定でした。税関支所が設置され、貿易促進の道が開ける一方、強靱で利便性を増す港づくりが内務省直轄の国家事業で推進されることになったのです。

この築港整備は、昭和9(1934)年3月に完了しますが、今治市は片野淑人市長のもとでこれと連動した近代都市整備を推進しました。その際、風紀上の理由などで、米屋町を中心とする花街を吹揚公園の南側「南堀通り」へ移転する計画が持ち上がります。移転時期は大正12(1923)年秋頃のことで、新たに誕生した歓楽街を市民は`移転地、と称しました。

昭和13(1938)年発行の『今治繁昌記』(愛媛郷土研究会)によると、当時の今治市の花柳界は料理屋33軒・置屋13軒・芸妓約100名で、主な料亭には錦園(旧みすか園)・常盤・楳月・花月・松久などがあったようです。



築港完成後の移転地
(昭和15年1月、阿部書林『今治市街地図』より ※部分抜粋)